

## 【資料紹介】

# 牽牛子塚古墳の夾紵棺片

— 植田兼司氏採集遺物 —

植田兼司・福庭万里子

## 1. はじめに

奈良県高市郡明日香村に所在する牽牛子塚古墳<sup>1)</sup>は、大正12年(1923)3月に史跡として指定された。内部中央に造られた壁を仕切りに東西で2室の石室を持つ古墳であり、その石室は一つの巨大な凝灰岩を削り抜いて作られたものとなる。石室内及び墳丘周辺からは、2棺分にあたる夾紵棺の破片が発見されている。牽牛子塚古墳の調査に関しては、大正3年(1914)に阪合村役場による保存工事に伴う調査が初めとなる。その後、昭和52年(1977)に網干善教先生を中心に関西大学文学部考古学研究室が、史跡環境整備事業に伴う事前調査としての発掘調査に参加した。この調査の際に、夾紵棺片、七宝亀甲形座金具・金銅製八花文座金具・金銅製六花文座金具・金銅製円形座金具などの棺金具、鉄製品などが出土した。このうち、夾紵棺に関しては米田文孝先生によって復原を含めた報告がなされている<sup>2)</sup>。

牽牛子塚古墳の夾紵棺は全て大小の破片であったことから、現在各機関や個人によって分蔵されている<sup>3)</sup>。この度、植田兼司氏から関西大学博物館へ夾紵棺片数点が寄託される運びとなった。その資料紹介をする機会をいただいたので、以下に紹介したい。

まず、紹介する夾紵棺片の採集・寄託の経緯を中心に、2章を植田氏にご執筆いただいた。

## 2. 牽牛子塚古墳発見の夾紵棺片について

筆者(植田兼司)もまた明日香村の高松塚壁画発見を機に考古学に傾倒することになった、高松塚の落し子のひとりである。発見の昭和47年(1972)当時、筆者は9歳であった。発見の報道があった直後に発掘現場に押しかけた。石槨にとどくだろう発掘の墓道は半ば埋め戻され、関係者の「石室は埋め戻しましたので壁画は見る事が出来ません」という声だけが今も心の中に響いて残っている。世間はその後、明日香村や考古学の空前の大ブームをおこして誰もが古代というロマンに心を傾けたのだった。当然のことながら筆者もこの波にのみ込まれて古代関係の本を読みあさり、遺跡を訪れたり、博物館の見学に明け暮れた。もちろん明日香村の諸遺跡は第一の聖地であり最も頻繁に訪れた所である。

こんな遺跡来訪をしているうちに昭和49年(1974)のことである。12月の末に近い頃、筆者は母親と牽牛子塚を訪れて壊れた鉄の扉から石槨の中にもぐり込んで遊んでいた。石槨から出ようとした時、石槨の凝灰岩と扉石である石英安山岩のすき間にコルク製の板片のようなものが落ち

ているのを発見した。とっさに「あれだな」と思った。遺物の表面の土を落とすと赤い色が現れた。間違いはない。その日は夕方に近く「金烏西舎に臨ら」う夕闇の中の出来事であったので、もっと落ちているかどうかは後日に期することにして帰宅した。

昭和51年（1976）初夏にようやく再訪することができ、石槨内に水が溜まっているのを確認した。よく観察すると、おそらく石槨と直接閉塞していたと思われる2枚の扉石のうち東側にある4つに割れた凝灰岩のまわりに以前採集したのと同じような夾紵棺片が露出していた。注意深く観察すると少なくとも4～5片が比較的やわらかい土中に半ば露出しているのを確認した。棺片は南側墳丘の下でも発見された。

この古墳の内部主体は、それぞれが個性的な終末期の石室石槨の構造があるなかで特に変わったものである。巨石をくり抜いて墓室を2個つくり2石をもって閉塞した。そして更にまたもう一つの巨岩を立てて塞いでいる。盗掘者は高松塚古墳やキトラ古墳でしたような方法では墓室に入ることは出来ない。巨岩の閉塞石の南側墳丘に大きな盗掘孔を穿ち、巨岩をまず南側に傾斜させて内側の扉石を墳丘にひきずり出したのである。そうしてはじめて墓室があらわれた。盗掘者は棺をひきずり出し、それを破壊して副葬品を奪ったのであろう。この激しい盗掘が行われたのは多分にもれず中世であろうか。筆者は棺片の採集時にこのことを考えた。最初の盗掘で取り散らされた遺物ではない。何度も何度も盗掘が行なわれて価値のない棺片はその都度掘り返されて捨てられてきた。その近今の盗掘のあとに筆者が偶々出合ったのであろうと。

ある棺片は表土からめくってみると既に蟻の巣になっており棺片の内部に空洞をつくって無数の蟻と幼虫と卵で充満していた。採集した棺片のひとつに釘穴と八花文の金具の痕跡のあるものがあつた。発見当初は八花文金具の痕跡はかなり明瞭に観察された。釘穴は四角形を呈し、一辺が棺片の断面にかかって欠落していた。その棺片の断面は風化の度合いが少なく、近時に割れたものと考えられた。この故にこの釘穴に存在したであろう飾金具を探したがはたして見付けることが出来なかった。飾金具や釘穴の痕跡の漆表面には朱色が残っていたので棺の製作では装飾金具やそのとり付けの釘穴までも精密に予定されて作られたのちに金具類ははめ込まれたようである。その破折には段のような箇所があり、棺体にはめ込む棺蓋の部分ではないかと考えた。

昭和52年（1977）3月にここを訪れたとき、時はあたかも当該古墳の整備調査の最中であつた。墳丘もかつて棺片を採集した石槨付近もすっかり発掘調査の仕様が変わっていた。生まれて初めて見る発掘現場であり牽牛子塚古墳である。若い調査者の胡散臭い視線を感じつつも墳丘に登り石槨に近づいて出来るだけその様子を観察しよう。そのうち年配の調査者がやって来て、「墳丘は八角形と思われます。形状が崩れますから登らないで下さい。」と口に手を当てて叫ばれたのだった。網干教授だった。その時、以前採集した棺片のことをお尋ねしようと思ったけれども、子供ながらに多分子供だから相手にされないだろうと考えて何も言わずにその場を去つた。

平成20年（2008）6月に筆者は高松塚壁画を実見する機会に恵まれた。幼時からの念願が叶つたのである。と共に30数年間死蔵されたままになっている夾紵棺片も公表しなくてはならない、と考え堺市文化財課の近藤康司氏を通じて関西大学博物館に學術活用して頂く様に保管をおねがひした。

### 3. 植田氏採集による夾紵棺片の詳細

終末期古墳では、全体の規模が縮小するものの、墳丘及び石室（槨）、棺などの多様化がみられ<sup>4)</sup>、棺では土製・陶製・木製・石製・金属製・漆塗製など多岐にわたる異なる性質や加工がある<sup>5)</sup>。中でも夾紵棺をはじめとする漆塗棺の製作・使用時期は、聖徳太子墓の620年代から天武・持統天皇陵の680年代が確実とされ<sup>6)</sup>、全体でも7世紀前半から8世紀前半に限定されると考えられている<sup>7)</sup>。これらの漆塗棺は、漆の下地材質や製作技法によって名称が異なり、布と漆を何重にも張り合わせて棺を形作った夾紵棺、他に漆塗木棺、漆塗籠棺、漆塗石棺、漆塗陶棺が現在確認されている<sup>8)</sup>。

夾紵棺の製作技法は猪熊氏が言及しているように、原型に麻などの布を張り、さらに麦漆を接着剤として布と漆を交互に貼り合わせ、一定の厚みを持たせたのちに原型を外して完成させる脱乾漆であり、使用される布地は、牽牛子塚古墳の場合は麻であったが、安福寺蔵品のように絹の例もある<sup>9)</sup>。牽牛子塚古墳の夾紵棺は全て破片となって出土したが、大阪府高槻市に所在する阿武山古墳から出土した夾紵棺は昭和9年（1934）の調査当時にも完形を保っていた<sup>10)</sup>。報告によると、身は全長197cm、幅62cm、高さ51cmとなり、蓋は全長221cm、幅68.5cm、高さ9cm、身の上縁周囲にめぐらされた突帯で蓋を受けるという形状である。布は比較的目の粗いものが20枚以上重ねられ2.3cmの厚さとなり、身・蓋とも外面に黒漆、内面全体に朱漆が塗布されていたようである。完形の夾紵棺として貴重な例であるが、調査の後に石室内に埋め戻されており、現在目にはできない。

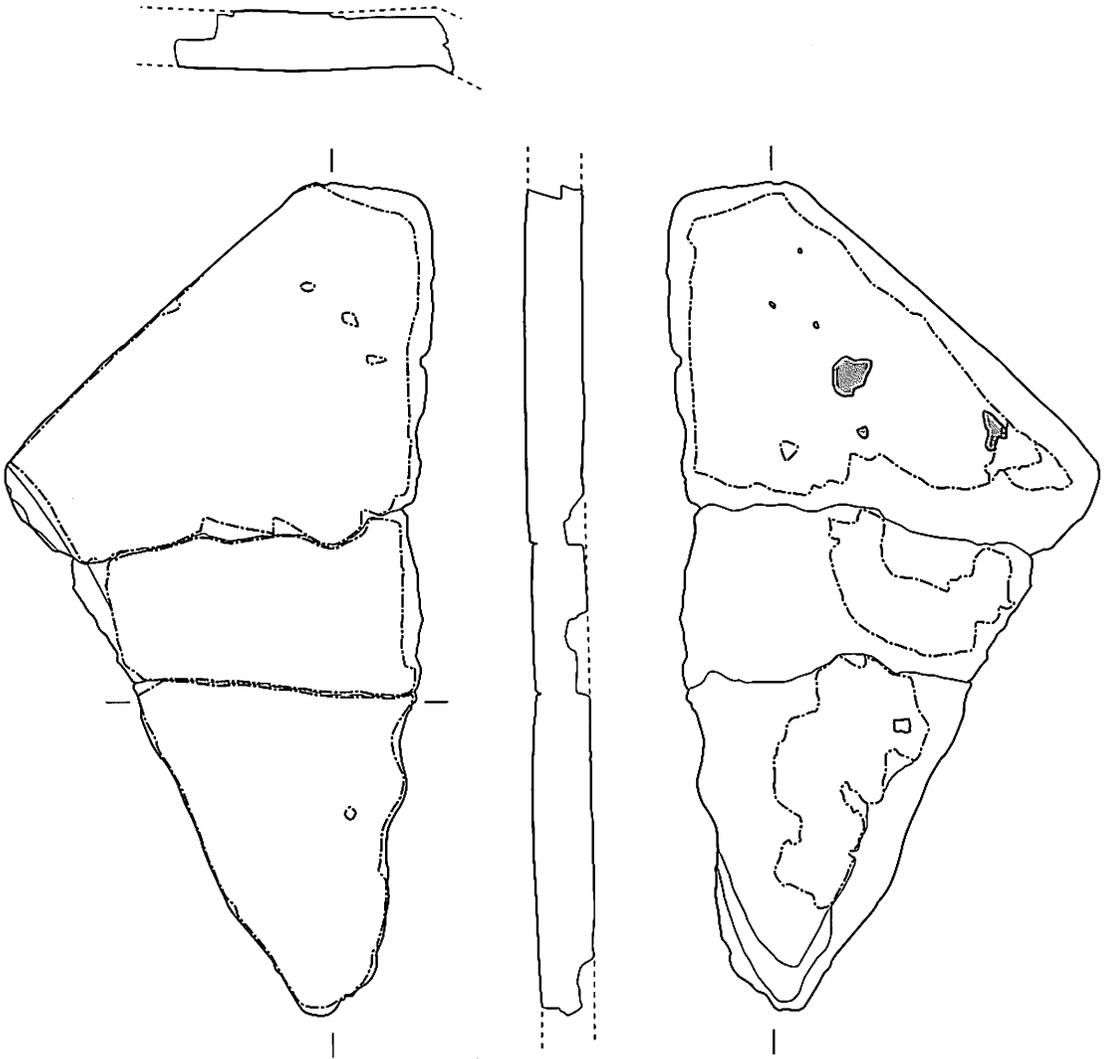
これまでに夾紵棺が確認されている古墳は以下の8例で、このうち牽牛子塚古墳及び聖徳太子墓ではそれぞれ2棺の存在が確認されている<sup>11)</sup>。

1. 野口王墓古墳（天武・持統天皇合葬陵）<sup>12)</sup>〔奈良県高市郡明日香村〕
2. 牽牛子塚古墳〔奈良県高市郡明日香村〕
3. 平野塚穴山古墳<sup>13)</sup>〔奈良県北葛城郡香芝町〕
4. 阿武山古墳<sup>14)</sup>〔大阪府高槻市〕
5. 叡福寺北古墳（聖徳太子墓）<sup>15)</sup>〔大阪府南河内郡太子町〕
6. 塚廻古墳<sup>16)</sup>〔大阪府南河内郡河南町〕
7. 八幡山古墳<sup>17)</sup>〔埼玉県行田市〕
8. 安福寺蔵品<sup>18)</sup>〔大阪府柏原市〕

前述のように、植田氏から寄託していただいた夾紵棺片は牽牛子塚古墳のもので、比較的大きな破片6点、漆層のみが剥離したものなど5cm四方以下の小破片十数点である。以下、各個について略述する。なおK1～K4の名称は掲載図面及び写真との照合のため便宜的につけたものである。

#### (1) K1

6点のうち3点は接合が可能であり、合わせた状態では残存長34.3cm、残存幅16.7cmである。

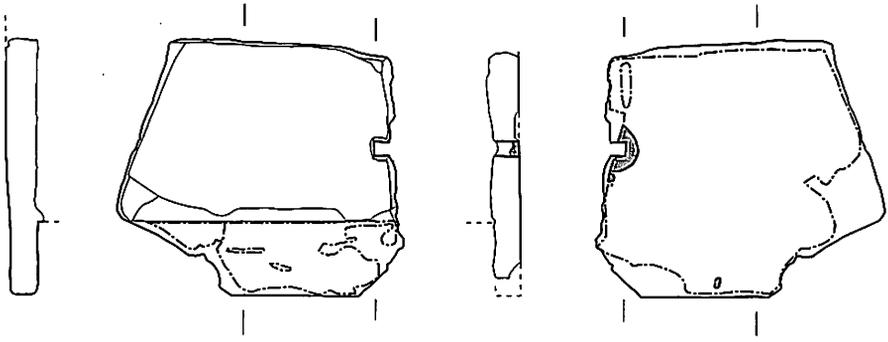


K1

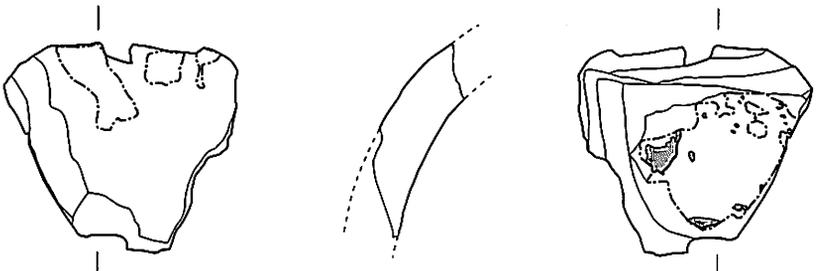
- 表面上の黒漆が残る範囲
- 朱が確認できる範囲
- ..... 復元部分

0 5 10cm

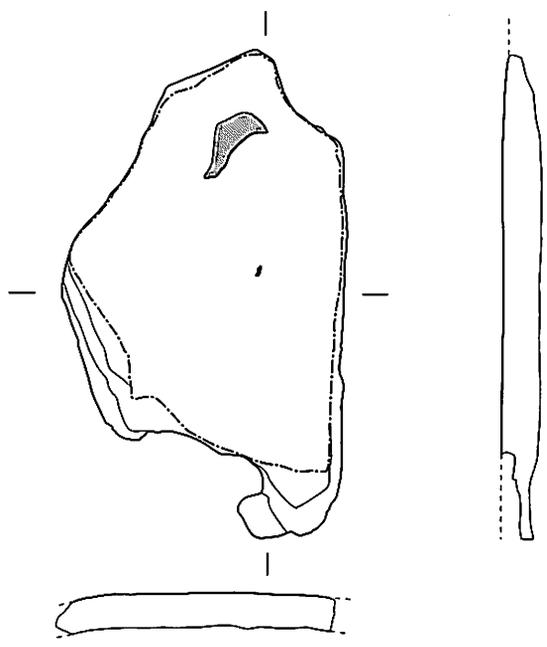
図1 夾紵棺片実測図



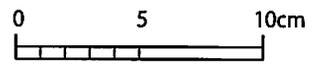
K2



K3



K4



夾紵棺片実測図

内面と考えられる側に向かって150度に屈曲する部分がわずかに残存している。屈曲する面の内側はほぼ均一に表面の漆が残り、布目の露出も少ないが最も表面上に塗られたと思われる黒漆はあまり確認できず、剥がれた状態である。外面側では漆が剥離し布目が露出する部分も多いが、表面上に全体の三分の一ほど黒漆が残る。両面ともに表面の漆が残る部分での厚さは2.3cmで、重ねた布の枚数は34枚～35枚になる。

## (2) K2

最長部で残存長10.3cm、残存幅11.5cmである。漆が施された端部が残り、端部から3cmの位置に90度の屈曲部が残ることから、棺身もしくは棺蓋の縁部であることがわかる。端部から屈曲部までの間の厚さは1.1cmとなり、布は17枚を数えることができるが、屈曲部を越えると一方の面が剥離しているため本来の厚みは不明である。端部から屈曲部までは両表面とも漆が残り、釘穴の周囲に座金具の痕跡が残る面には全体に黒漆が残っている。端部は棺蓋と棺身の受部であることから摩耗したのか、最表面の黒漆の痕跡はあるもののほぼ剥がれており、さらに下の漆が露出している。

この破片は釘穴を有しており、屈曲部から2.7cm、端部から5.7cmの箇所に長さ0.6cm、残存幅0.7cmの釘穴が穿たれている。釘穴は内部まで黒漆が塗られ、さらに黒漆上に朱が確認できる。釘穴周囲の黒漆上には座金具の痕跡があり、金具と接していた面にはその形状に沿って朱が残っている。これらの痕跡から金銅製八花文座金具とみられ、採集当時には八花文の形状に圧痕も残り、かなり明瞭に確認できたとのことである。しかしながら、時間が経過したことによる縮みなども影響し、現在ではその痕跡は不明瞭となっている。現状では、金具の痕跡を残す他の資料と照合するなどの検討を行っていないため、断定することはできない。

## (3) K3

最長部で8.6cm×9.3cmになる破片で、全体にゆるやかに湾曲している。厚さは両面ともに黒漆が残る箇所が2.1cmになり、布の枚数は34～36枚が数えられる。外面と考えられる側では黒漆上全体に朱の付着が認められるが、これが本来から黒漆上に塗布された朱であるのか、内面に塗布されていた朱が付着したものか判別は難しい。

## (4) K4

最長部で19.6cm×11.6cmの破片である。数えられる布の枚数は19～21枚で、厚さは1.4cm～1.6cmが残る。片面には全体に黒漆が残り一部には朱も認められるが、もう一方の面は全体に布目が露出し剥離しているため本来の厚みは不明である。

## 4. 牽牛子塚古墳夾紵棺の復原

1977年の調査報告書では、関西大学考古資料室所蔵品及び奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵品を合わせて、牽牛子塚古墳夾紵棺の復原が行われており、2棺の形状に関しては図2のように復原された<sup>19)</sup>。報告書から復原の要点をまとめると以下ようになる。

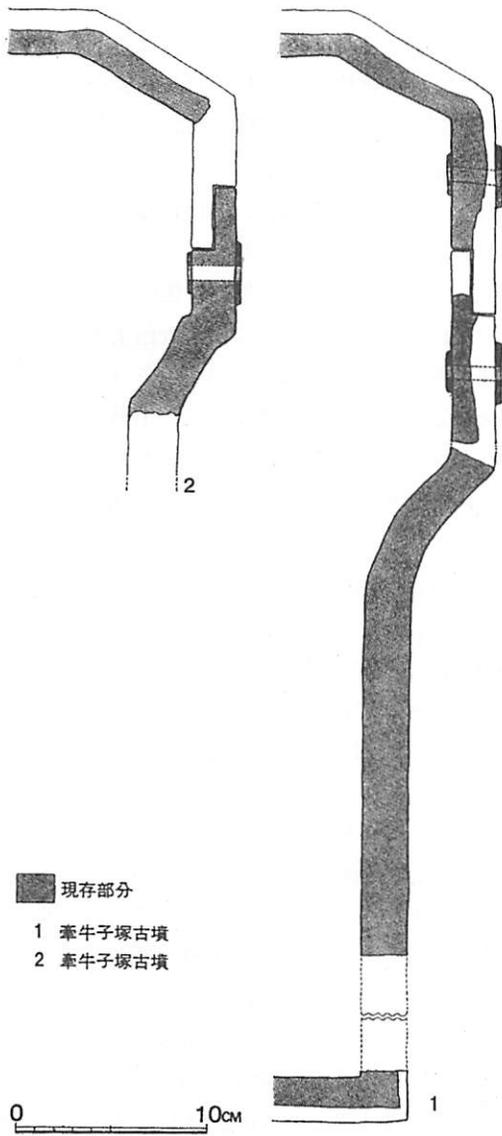


図2 牽牛子塚古墳夾紵棺復原断面図  
〔米田 1977〕

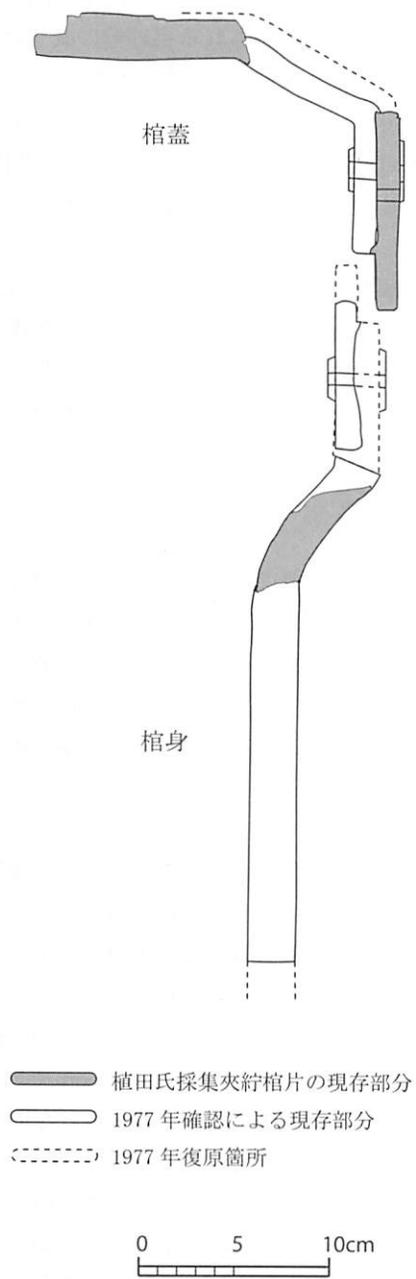


図3 植田氏採集夾紵棺片を合わせた復原断面図

棺の大きさは棺台の値から推測されている。牽牛子塚古墳の棺台は東西両室に各1個ずつとなるが、東西それぞれの長さは中央部上辺長で193.5cm、192.5cm、底辺長で195.5cm、195cm、幅は中央部上辺幅で78.7cm、78.4cm、底辺幅で80cm、80.7cmである。この棺台寸法及び石室の形状から推測される夾紵棺の概寸は長さ180cm、幅65cm程度、高さについては不明ながら棺片などから最低53cm程度とされた。さらに確認されている破片から、棺蓋は内寸7.0cm、外寸推定8.5cmの稜をもち、天井部は幅50cmほどの平坦部となる。稜の屈曲角度は天井部側で150度、側面部側で118度である。さらに、全体の厚さは2.2cm～2.4cmとなる。製作方法は、原型に合わせて張った麻布を、麦漆を使用して接着し、それを交互に35枚重ねて2.3cm前後の一定の厚さにしたとみられている。縁部では17～18枚重ねられ、厚さ1.2cm前後に調整している。麻布の粗さは1cm間に経糸・緯糸とも7～14本の糸があり、9～10本のものが多い。他に、一方の面が剥離するもので1.2cm前後の厚さを残す縁部の破片が確認されている。この1.2cm前後の厚さをもって剥離した破片が多いことに関しては、屈曲部の断面は布を何枚も重ねているうちに稜が丸みを帯びるためその個所に錆（木粉）でもって稜を修正した部分（内側より1.2cm前後）がみられ、そこで仕事を一旦停止するためとして、猪熊氏によって指摘されている<sup>20</sup>。また、棺の内面表面には全面に朱が塗布されており、外面が黒漆、内面は黒漆上に朱が塗布された状態とされた。

以上の復原内容を参考に、今回の資料が棺のどの部分に該当するかを検討してみたい。

K1は残存する屈曲部分の角度が150度を測り、これは復原されている棺蓋天井部側の角度と2棺ともに一致する。このため、棺蓋の平坦部が稜角部にあたるのが考えられるが、K1の残存幅は最長部で16cmを超え、稜角部分の内寸幅は7cmとすでに該当する破片が確認されている<sup>21</sup>ので平坦部とできる。よって黒漆が残る面が外面となり、両面ともに漆が残る箇所から天井平坦部の厚さは2.3～2.4cmとなる。

K2は端部と釘穴が残ることから、棺身もしくは棺蓋の縁部分であることは明確である。さらに、黒漆が残る面の釘穴周囲には、現状では花文の様子が不明瞭となっているものの金銅製八花文座金具と考えられる痕跡が残っている。すでに確認されている縁部分の破片から、蓋と身の縁部の組み合わせは図2のように2棺それぞれに異なった形状をしていたと復原されている。八花文座金具が使用される面は棺の外面にあたるのが妥当であるので、そうするとK2は棺1の蓋もしくは棺2の身どちらかの縁部分に該当するが、そのうち棺2の棺身は、縁部から棺底へ向かって側面が外寸約7.5cmで内側に屈曲しており、これは同様箇所の外寸で10.3cmに至っても平坦となるK2とは一致しない。以上のことから、K2は棺1の棺蓋縁部に該当する可能性が高い。しかしながら、K2の釘穴周囲において金具と接していたと思われる部分に残る朱が八花文よりも小さいことや、他の破片における縁の端部から釘穴までの距離で釘穴ひとつ分のずれが生じることなどもあり、その他の可能性も考えられる。

K3の破片は全体にゆるやかに湾曲している。1977年調査の際に、同様に湾曲した側面部にあたる破片が出土している。これは、縁部から棺底部へと向かい一度湾曲した後に平坦になるという形状をしており、2棺のうち図2の棺1にのみ該当する。K3の湾曲部分はこの側面箇所とほぼ一致しており、他にこのような湾曲の箇所が見られないことから、棺1側面の破片とみられる。

K4に関しては、一方の面のみ黒漆が残る状態で、厚みも本来の状態が残らず1.4cmのところ



図4 御嶺山古墳出土品<sup>22)</sup>  
(金銅製環金具・金銅製九花文金具)

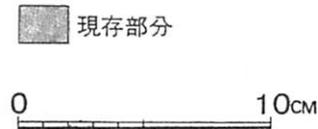
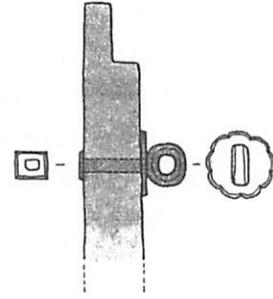


図5 御嶺山古墳 棺身部復原図<sup>23)</sup>

で剥離している。明確な位置は不明であるが、棺蓋の平坦部か棺身の側面もしくは棺底の一部になると考えられる。

さて、これらの夾紵棺片の中で、K2には八花文座金具の痕跡が残る釘穴があることに注目できる。この釘穴の使用に関して、1977年の復原では御嶺山古墳の環金具（図4）の例と同様に、牽牛子塚古墳の場合は金銅製八花文座金具と円形座金具を用い、出土はみられないものの環金具を図5のように取り付けたと考えられている。図2の棺2に関しては、その形状から棺身にのみ環金具が付けられている可能性が指摘され、棺1は御嶺山古墳と同様に蓋と身で対になる環金具に錠を通し、棺2では両側面の身の部分の環金具に紐を通し蓋の上で固定したと推測された<sup>24)</sup>。この釘穴の個数及び配置が確認できれば、牽牛子塚古墳夾紵棺における棺金具の様子について復原を行うことができる。

管見によるがこれまでに確認できる破片のうち釘穴を有するものは少なくとも7個となる。1977年の調査報告書に掲載されたもので釘穴を有する破片は5個、釘穴の箇所は欠けているものの八花文座金具の痕跡が残るものが1個ある。さらに、橿原考古学研究所附属博物館の所蔵品として棺身の縁部にあたる破片があり、縁の端部から4.0cm離れて長方形釘穴が穿たれて、金銅製八花文座金具がついていたことがわかっている<sup>25)</sup>。これらに、今回の棺身縁部の破片（K2）を加えて、2棺で少なくとも8個の釘穴が存在することがわかる。また、発見されている夾紵棺片が本来使用された量よりもはるかに少ないことを考えればこの釘穴の数はさらに増えると考えることができる。発見される夾紵棺片と全体像との割合について、復原される棺の寸法から棺全体の表面積との比較を考えると次のようになる。

1棺の大きさは、蓋と身を合わせて長さ約180cm、幅約65cm、推定高約55cmである。棺蓋の高さは、縁から天井部までに稜角を持っており、縁から稜角部までの平坦部外寸が最低でも約10cm、そこから118度の傾斜があり稜角部の外寸が約8.5cmとなって天井部へ届いている。このことから蓋の縁から天井部までの垂直の高さは約14cmとなり、このとき棺身は長さ約180cm、

幅約65cm、高さ約41cmとなる。棺身全体の面積は、棺底が約11,700cm<sup>2</sup>、側面が約2,665cm<sup>2</sup>が2面と約7,380cm<sup>2</sup>が2面となり、5面を合わせた面積は約31,790cm<sup>2</sup>となる。棺蓋は、稜角部分を考慮すると天井平坦部に関しては長さ約165cm、幅約50cmとして面積は約8,250cm<sup>2</sup>となる。稜角部は、上辺約50cm、下辺約65cm、高さ約8.5cmで面積約488.75cm<sup>2</sup>が2面、上辺約165cm、下辺約180cm、高さ約8.5cmで面積約1466.25cm<sup>2</sup>が2面となり、これら4面を合わせて面積は約3,910cm<sup>2</sup>である。残る稜角より縁部へ向かう面は、外寸約10cmとして、長さ約65cm、幅約10cmで面積650cm<sup>2</sup>が2面、長さ約180cm、幅約10cmで面積1800cm<sup>2</sup>が2面となり、4面では面積約4,900cm<sup>2</sup>となる。棺蓋はこれら9面を合わせて17,060cm<sup>2</sup>である。以上のように1棺で約48,850cm<sup>2</sup>（棺身約31,790cm<sup>2</sup>、棺蓋約17,060cm<sup>2</sup>）となり、2棺では約97,700cm<sup>2</sup>と考えることができる。

現在、発見されている破片を全て合わせた総計の表面積がどの程度になるのかは破片の大きさにバラつきがあり、また確認できないものも多いため、今回算出することはできなかったが、以上のような2棺全体の表面積に対して半分にも満たない量が現状のようである。

また、牽牛子塚古墳が盗掘にあった際に、特定の部分の夾紵棺片のみが抜き去られるということは考えにくく、未発見の破片の部分は全体に均等にあると思われる。もし、特定の部分のみが抜き去られる可能性があるとするれば、釘穴の周囲にある金具を目的に縁部分が多く紛失する可能性が高いだろう。そのような状況でも、釘穴は少なくとも8個が確認でき、発見されていない破片の割合から考えれば、さらに釘穴を有する破片が存在するといえる。

前述のように釘穴には環金具の使用が推測されるが、環金具に付属する錠としては、正倉院御物における厨子や櫃に付属する金具からその形状を考えることができる<sup>26)</sup>。夾紵棺の棺蓋・棺身の両側面にそれぞれ一つずつ釘穴があり、環金具が取り付けられていたとした場合、錠には密陀彩絵箱（図6）に使用されるような鎖子（図7）が考えられる。現在確認できるだけの釘穴の個数では、2棺それぞれに両側面の長手か木口に2個1対となって環金具が付けられ、鎖子によって錠がされたと考えることもできるが、前述のように現状確認される破片より釘穴を有する破片

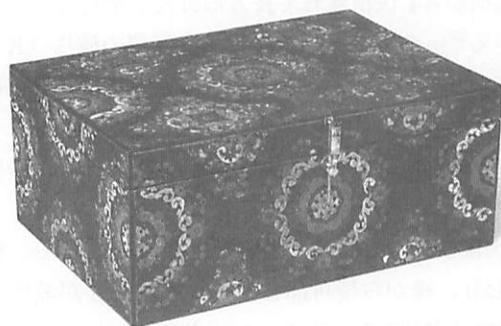


図6 密陀彩絵箱 第13号<sup>27)</sup>



図7 密陀彩絵箱（鎖子拡大図）



図8 黒柿蘇芳染小櫃<sup>28)</sup>

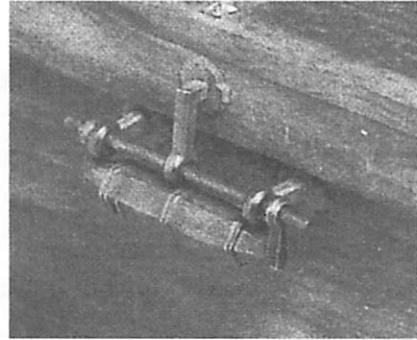


図9 黒柿蘇芳染小櫃（錠金具拡大図）

がさらに増える可能性が高いとすれば、棺の4面に2個1対で付けられるなどの可能性がある。もしくは、黒柿蘇芳染小櫃（図8）のように蓋に1つ、身に2つと3個1対で取り付けられ横向きの錠が使用されたともみることができる。正倉院御物の場合、箱の大きさによって使用される釧子の長さも異なってくるようだが、牽牛子塚古墳夾紵棺で考えると、棺1では蓋と身に穿たれた釘穴の距離が約10.7cmとなり、釧子の長さは15cm～20cmは必要になると考えられる。正倉院に残る類例には長さ16～18cm前後のものも多い。現在確認される夾紵棺片からは、棺全体の中での釘穴の配置箇所まで特定することはできないが、錠金具については正倉院の類例と同様とみることが可能といえるだろう。

最後に、牽牛子塚古墳夾紵棺の内外表面の仕上げに関して触れておきたい。牽牛子塚古墳の夾紵棺表面は内外とも黒漆が施され、少なくとも棺の内面には全面に朱が塗布されたと考えられている<sup>29)</sup>。このとき、外面に関しては一部に朱の痕跡が見られるものの、当初からの塗布であるのか、後に破片となった際に内面と接したために付着したものかは定かではないとされた。今回の資料にも、K3のように外面と考えられる側に明らかな朱の痕跡が残るものがある。

他の夾紵棺、漆塗棺の例をみると、阿武山古墳の場合は、「棺の表面には黒漆を塗り、また内面は全部朱漆を加えて後者が鮮やかな色彩を呈したのであった」<sup>30)</sup>とあるように内面のみに朱漆が施され、外面は黒漆のみであった。高松塚古墳の漆塗木棺の場合は、内外面ともに板の上に布を張り、漆を重ねたうえで、内面には朱が施され、外面には金箔の薄片が付着していたことから金箔が施されていたと確認されている<sup>31)</sup>。さらにキトラ古墳の場合は、近年の発掘調査から両面ともに朱色が施された可能性が指摘されている<sup>32)</sup>。棺外面に施されたとみられる金具の下から水銀朱が確認されており、内面だけでなく外面でも一部に朱が施されていた例である。このように棺の内面は基本的に朱が施されるが、外面に関しては黒漆のみの場合と、朱もしくは金箔の類例が確認できる。牽牛子塚古墳の夾紵棺の場合、高松塚やキトラとほぼ近接する時期において被葬者は同等かそれ以上と考えられるため、棺の外面の装飾に関して共通する可能性は高く、高松塚のように金箔が張られていた可能性もある。

## 5. おわりに

牽牛子塚古墳の夾紵棺は、さまざまな機関及び個人の方に所蔵されているため全体を見通した復原が難しい状況にある。今回の夾紵棺片紹介によって、牽牛子塚古墳夾紵棺の全体像を把握するための材料となれば幸いである。また、復原の際に金具の痕跡や釘穴の位置、内外面の調整などの不明確な部分に関して、今回の資料を手がかりに、他の牽牛子塚古墳夾紵棺片も合わせて今後更に検討していきたい。

なお、本稿の執筆に関しては米田文孝先生による「牽牛子塚古墳出土夾紵棺の復原」を参考にさせていただき、また新たにご教示を賜りました。ならびに、夾紵棺の実測及び写真撮影に際しては関西大学博物館の山口卓也氏より多大なご配慮を賜りました。遺物写真は年未亮平氏に撮影していただきました。

末筆ながら記して深謝いたします。

本稿は、2章を植田兼司が、1章及び3～5章を福庭万里子が担当した。

### 註

- 1) 網干善教 1977 『史跡牽牛子塚古墳——環境整備事業に伴う事前調査報告——』 奈良県高市郡明日香村教育委員会
- 2) 米田文孝 1977 「牽牛子塚古墳出土夾紵棺の復原」『史跡牽牛子塚古墳——環境整備事業に伴う事前調査報告——』 奈良県高市郡明日香村教育委員会
- 3) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 「飛鳥時代の古墳」によると、1979年に開催された展示会「飛鳥時代の古墳——高松塚とその周辺——」では以下の機関及び個人が所蔵する夾紵棺片が展示された。明日香村（一括）、奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館（12点）、奈良教育大学（1点）、水木箬夫氏（5点）、奈良女子大学（一括）、松平文華館（3点）、京都大学（5点）、関西大学（19点）、長府博物館（1点）、九州大学（1点）、国学院大学保管（7点）。
- 4) 直宮憲一 2003 「終末期古墳の特徴 墳丘の形」、堀田啓一 2003 「終末期古墳の特徴 石室と棺」『季刊考古学』82
- 5) 堀田啓一 2003 「終末期古墳の特徴 石室と棺」〈前掲4〉
- 6) 伊達宗泰 1972 「漆塗木棺について」『壁画古墳 高松塚調査中間報告』奈良県教育委員会・明日香村
- 7) 渋谷綾子 2001 「古墳時代における漆棺の研究——夾紵技術の源流をめぐって——」『ヒストリア』175
- 8) 塚口義信 1995 「大化の新政府と横口式石槨」『古代学研究』132、堀田啓一 2003 「終末期古墳の特徴 石室と棺」〈前掲4〉、相原嘉之 2005 『飛鳥の奥津城』奈良文化財研究所・飛鳥資料館
- 9) 猪熊兼勝 1967 「夾紵棺——玉手山安福寺藏品に関連して——」『関西大学考古学研究年報』1

- 10) 大阪府文化財センター 1936 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第七輯 摂津阿武山古墓調査報告』、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 『飛鳥時代の古墳』
- 11) 〈前掲8〉
- 12) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 〈前掲10〉
- 13) 奈良県教育委員会 1977 『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第32冊、塚口義信 1991 『平野塚穴山古墳の被葬者について——いわゆる大化の薄葬令の問題を中心として——』『有坂隆道先生古稀記念 日本文化史論集』 同朋社
- 14) 大阪府文化財センター 1936 〈前掲10〉
- 15) 梅原末治 1940 「聖徳太子磯長の御廟」『日本考古学論攷』 弘文堂、山本彰 1993 「聖徳太子磯長墓考」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』
- 16) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 〈前掲10〉
- 17) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 〈前掲10〉
- 18) 猪熊兼勝 1967 〈前掲9〉
- 19) 米田文孝 1977 〈前掲2〉
- 20) 猪熊兼勝 1967 〈前掲9〉
- 21) 猪熊兼勝 1967 〈前掲9〉
- 22) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 〈前掲10〉
- 23) 米田文孝 1977 〈前掲2〉
- 24) 米田文孝 1977 〈前掲2〉
- 25) 猪熊兼勝 1967 〈前掲9〉、米田文孝 1977 〈前掲2〉
- 26) 宮内庁・正倉院事務所 1975 『正倉院の漆工』 平凡社、正倉院事務所 1994-1997 『正倉院宝物 1-10 毎日新聞社』
- 27) 正倉院事務所 1995 『正倉院宝物』 5・中倉Ⅱ 毎日新聞社
- 28) 正倉院事務所 1995 〈前掲27〉
- 29) 網干善教 1977 〈前掲1〉
- 30) 大阪府文化財センター 1936 〈前掲10〉
- 31) 橿原考古学研究所 1972 『壁画古墳 高松塚調査中間報告』 奈良県教育委員会・明日香村
- 32) 奈良文化財研究所 2008 『特別史跡 キトラ古墳発掘調査報告』 文化庁・奈良文化財研究所・橿原考古学研究所・明日香村教育委員会

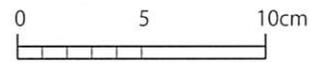
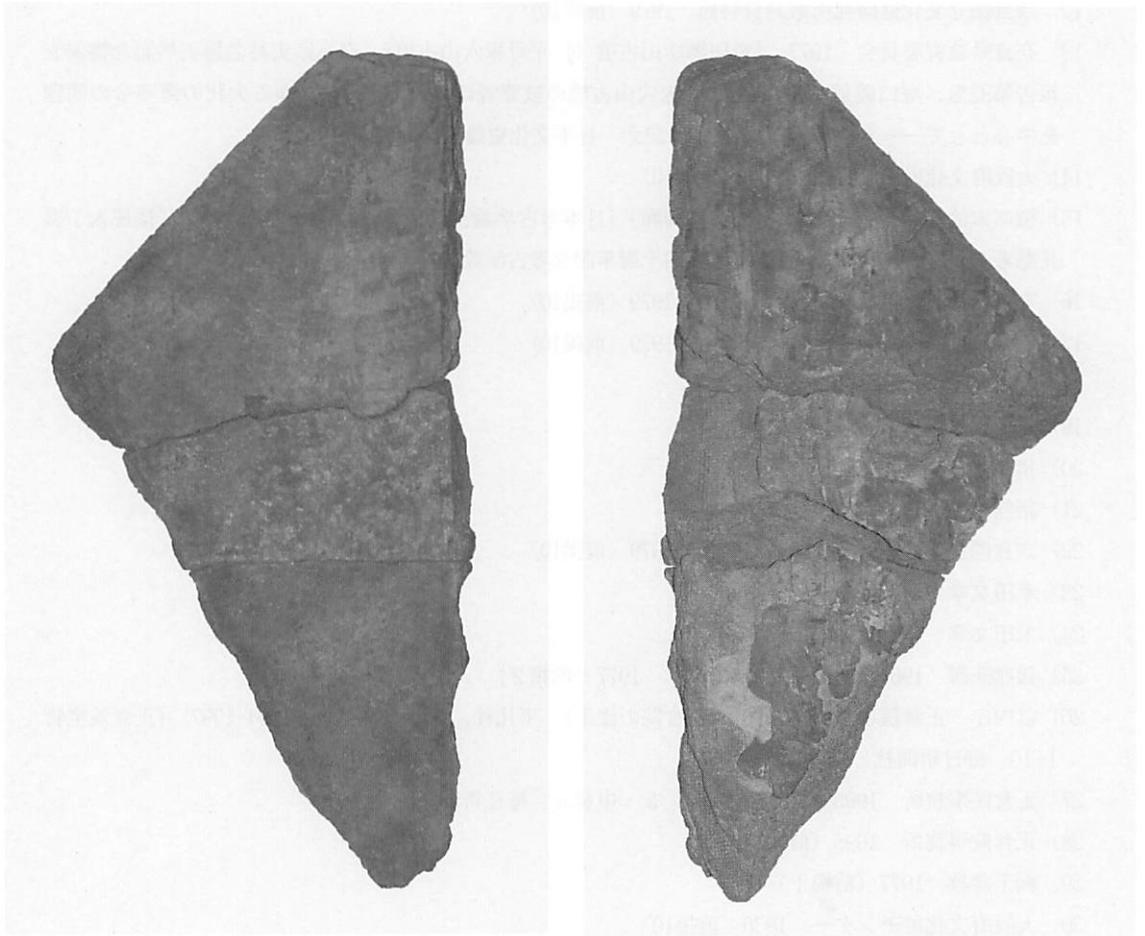


写真1 K1 (左:内面、右:外面)



写真2 K2 (左：内面、中央：釘穴部分拡大、右：外面)



写真3 K3 (左：内面、右：外面)

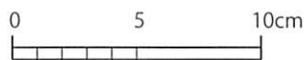
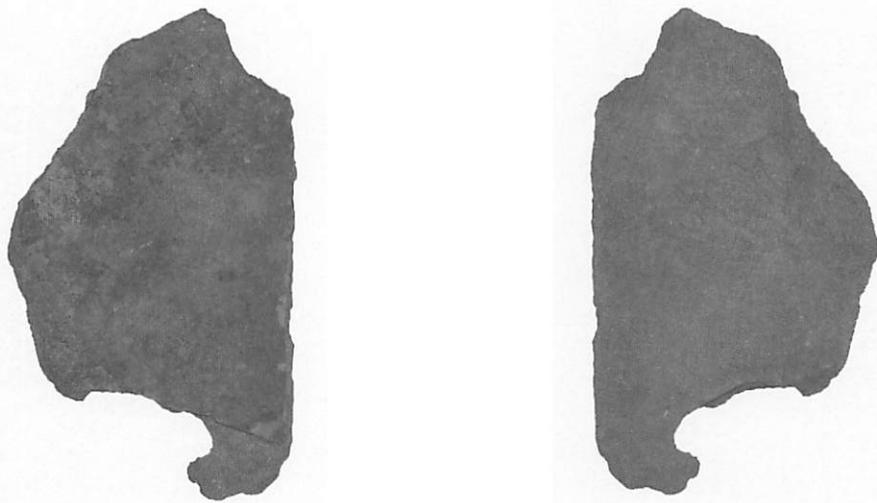


写真4 K4